

博物館だより

No.29

平成20年9月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
 福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
 TEL 0930-33-4666
 FAX 0930-33-4667

秋の企画展

小笠原文庫展Ⅱ

— 絵図・地図が語る近世・近代 —

10月7日(火)～11月24日(月)

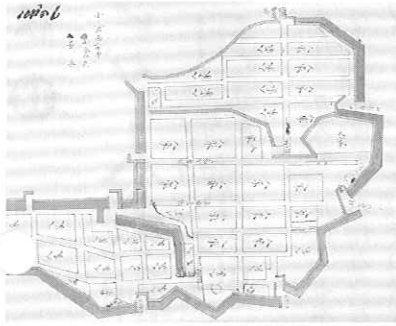
当館では10月7日から11月24日まで、秋の企画展「小笠原文庫展Ⅱ」絵図・地図が語る近世・近代」を開催します。

小笠原文庫とは、旧小倉藩主・小笠原家旧蔵の大名家文書を中心とした約7000点の史料群です。所蔵者は育徳館高校錦陵同窓会で、現在は当館に寄託されています。

今回の企画展では、小笠原文庫の中の絵図にスポットを当て、文字だけでは分かりづらい歴史情報を「絵」や「かたち」で読み取っていただきたいと思っています。

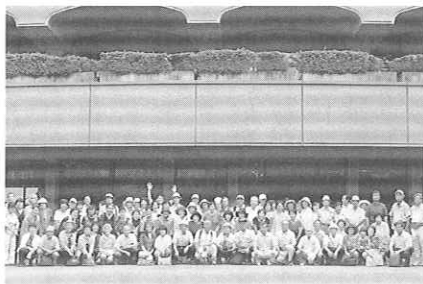
■主な展示資料

- 「豊前国海手縁絵図」(元禄期)
- 「英彦山中心田川郡絵図」
- 「小倉城下図」
- 「門司築港計画二千分の図」他



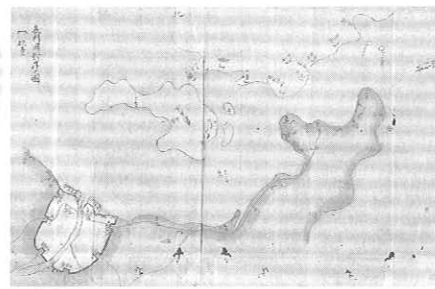
▲小倉市中戦争要図(部分)

今回は「夏の特別展鑑賞ツアー」と銘打ち、福岡市美術館の「ポストン美術館浮世絵名品展」、九州国立博物館の「島津の国宝と篤姫の時代展」を観覧しました。「篤姫ブーム」もあつ



▲福岡市美術館にて

◆8月の活動日誌から 博物館友の会バスハイク



▲長門対岸ノ図

て、今回は総勢90名の大人数となりましたが、参加者の皆様のご協力により目立った混乱もなく無事帰着しました。

◆「向井澄男写真展」

当館夏の企画展「不動Ⅲ」向井澄男写真展」が多くの方のご観覧をいただき無事終了しました。今回は「京築の自然と風土」をテーマに、郷土の祭や自然の姿を捉えた写真を展示しました。故向井澄男さんの写真展は今後テーマを変えて開く予定です。

9月期歴史講座のご案内



▲「不動Ⅲ～向井澄男写真展～」

- 【漢詩文講座】
9月6日(土) 9時30分～
- 【古文書講座】
9月13日(土) 10時00分～
- 【みやこ学講座】
9月20日(土) 10時00分～
- 【初級古文書講座】
9月26日(金) 10時00分～
- 【みやこ学講座】
9月27日(土) 9時30分～

《古文書解読コーナー》

① 野々

② (ヒント) 明治維新のこと

③ 夜

④ (ヒント) あさはか。誠意がない。

⑤ 夜

(ヒント) 生活に苦しむ

⑥ 夜

(ヒント) このたび

⑦ 夜

(ヒント) 今年は9月23日が中日

◎ 答え

(反対向きに見てください)

- ① 野々
- ② 維新
- ③ 夜
- ④ 夜
- ⑤ 夜
- ⑥ 夜
- ⑦ 夜

みやこの歴史発見伝 18

育徳館オランダ人教師

雇用顛末記 ②

第二次大橋洋学校

豊津県が雇用したオランダ人教師ファン・カステールは、明治四年（一八七二）九月にようやく九州入りが叶いました。「西洋人は人の油、または血をとる」との噂などで、豊津の育徳館へ赴任することが困難となりました。

そのため豊津県は、急場凌ぎの措置として、旧大橋御茶屋の建物（現行橋市大橋に所在）を使ってカステールの洋学校を開くことにしました（以下、第一次大橋洋学校と仮称）。この旧大橋御茶屋では、既に明治三年（一八七〇）一〇月から、育徳館の分館として、日本人教師のみによる洋学校が開かれていました（第一次大橋洋学校、カステールの授業が育徳館で始まるのを前に、同館へ統合されたばかりでした。しかし、結局カステールが豊津に赴任できなかったため、育徳館では、第一次大橋洋学校から引き継いだ形で、日本人教師のみによる洋学授業が行われることになりました。

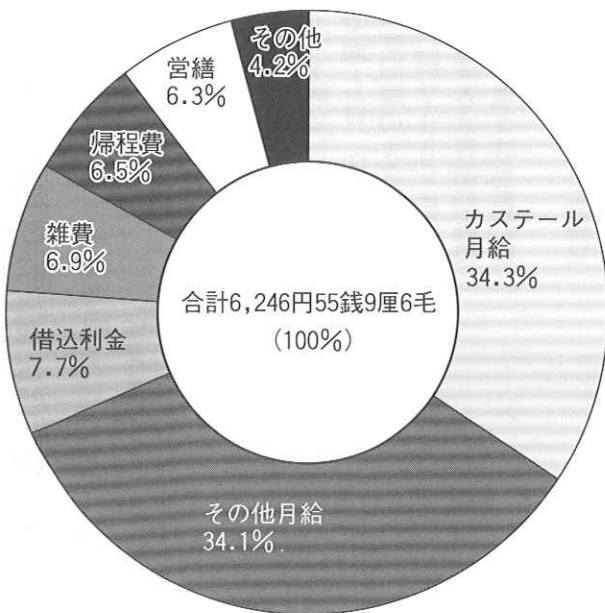
一方、旧大橋御茶屋（旧第一次大橋洋学校）には、再度洋学校が置

かれ、カステールによる本格的な洋学教育が行われることになりました。結果、質の異なる洋学教育が、本館（育徳館）と分館（第二次大橋洋学校）で並存するという変則的な学校経営が行われることになったのです。

「College Onashi」

ファン・カステールによる第二次大橋洋学校は、明治四年一〇月一日に開校しました。当初の契約では英語と仏語を教える

育徳館・育徳学校の校費支出状況
(明治5年10月～明治6年12月の総支出内訳)



【史料】 勢島文書「明治七年小倉県御布告」
(北九州市立自然史・歴史博物館蔵)

ことになっていました。実際には英語と独語が教授されたようです。寮長（校長）は、第一次大橋洋学校から引き続き勝平八郎（米内光政内閣通信大臣・勝正憲の父）でしたが、生徒の顔ぶれは第一次とは大きく異なっていました。これは第一次大橋洋学校の生徒が育徳館に籍を移したからですが、岩垂邦彦（NEC創業者）のように、第一次・第二次の両方で学んだ生徒もいたようです。岩垂邦彦の旧蔵史料（横浜市個人蔵）の中には、彼がカステールから成績優秀により授与された「College Onashi」(カレッジ・オーハシ)の銘の入った表彰状があります。

経営難と高給の支払い

豊津県は明治四年十一月一四

「小倉県に統合されますが、その後も育徳館の県費経営は当分維持されます。しかし、文部省が「諸廃旧学校」を廃止する方針であったため、育徳館の県費経営も明治五年九月までで打ち切られてしまいます。

一〇月以降は旧豊津藩士から俸禄一石につき一五銭を徴収し、それをもって育徳館を運営することになりました。

しかし、このような変則的な経営がうまく運ぶ筈もなく、途端に育徳館は深刻な資金不足に悩まされることになりました。中でも特に困ったのが、カステールへの高額な月給の支払いでした。彼との契約は、二回の再契約により明治六年（一八七三）十一月まで延長されましたが、月給は当初から変わらず月一七五円でした。この支払いのため、商人から多額の借金をせざるを得ない状況に陥ったのです。

明治五年一〇月から明治六年二月までの校費支出内訳は上段の円グラフのとおりですが、全支出の約三五パーセントは、カステールの月給で占められていた計算になります。カステールの離任

このような経営難の中、明治六年三月に校名は「育徳学



▲ファン・カステール旧居（みやこ町豊津・昭和43年撮影）
カステールは旧豊津藩市井（しせい）方役所の建物を豊津での住居とした。平成6年の台風により倒壊のため撤去。

校」に変更され、第二次大橋洋学校もカステールと共に同校に移されました。もう、「人の油をとる」だの「血をとる」だの言っている場合ではなかったのです。教育内容も英語・仏語・独語・洋算（西洋数学）のみとし、和学や漢学の授業は打ち切られました。

明治六年十一月、カステールは東京までの「娯楽費」（娯りの旅費）として三〇〇円を育徳学校から受け取りました。これは契約の規定にもとづいたもので、現在の貨幣価値で言えば三五〇万円程でしょうか。

果たして、彼の後ろ姿を見送った学校関係者は何を思ったでしょう。その後もしばらく、育徳学校の経営難は続きます。
(川本英紀)